

論文題名：高齢者介護施設における介護職員の人材育成

—現場での学びに着目して—

立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻博士課程後期課程

クロカワ ナオ

氏名 黒川 奈緒

近年、介護福祉事業の分野における多くの事業所が、恒常的な人材不足に直面している。また、介護ニーズが増大し、さらにそれらが高度化・多様化する中で、介護サービスの質的な向上が求められている。介護現場においては、非正規雇用労働者の増大、資格や経験の有無に関わらず福祉分野以外からの多様な人材が就労している実態がある。そうした背景の中で、介護サービスに従事する人材の育成が課題となっている。

これまで、介護職の人材育成に関わる議論は、養成校における教育と、現場職員を対象とした研修が中心に展開され、しかも、それらは別々に論じられてきた。さらに、昨今においては、現場職員のキャリアパスに応じた職務と能力を設定し、それに応じた人材育成の体系について研修を中心として整備していくという方向性での議論が目立つ。

そこで、本研究は、「介護福祉専門職が育つ場」として、介護福祉士養成校での教育、現任研修、介護現場の3つを想定し、さらに、養成教育と介護現場の接点として介護実習、現任研修と介護現場の接点として法人・事業所内で行われる様々な人材育成の取り組みについて検討することによって、専門職としての成長につながる要素を多面的・総合的に明らかにすることを目的とした。

特に、本研究においては、介護職員を「成長の主体」として捉え、「ワークプレイスラーニング」の概念から、介護職員の「現場での学び」に焦点を当てた。介護福祉を担う職員たち自身が「専門職としての成長」をどう捉え、それをどのような出来事の中で実感しているのかを、インタビュー調査をもとに検討した。その結果、日々の利用者との関わり、ターミナルケア、研修や指導を通じた学びの経験、職位や雇用形態の変化、法人内外での発表会・報告会、多職種連携とチームの成長、所属部署の変更や現場を離れる経験など、従来のOJT、OFF-JT、SDSといった研修形態に留まらず、多様なきっかけの中で学び、成長を実感していることがわかった。また、介護職員の成長には、①主体的な意思で職場の課題を設定する、②解決や実現に向けての方法を考え、学ぶ、③学んだことを周囲の職員に伝え、共有する、④周囲を巻き込みながらチームとして取り組むという、正のスパイラルが存在していた。このスパイラル全体を捉えることが、今後の人材育成を考える上で重要となることを指摘した。人材育成の方策として積極的に語られている現任研修は、あくまで成長のスパイラルを支える要素の1つであることを示し、その成長のスパイラルを支えるための条件を整備していく必要性を提起した。